

子どもと一緒に絵本「あ〜、よかった」

この連載も一区切りをつけることになりました。そうしたこともあって、今回は原点に戻り、子どもと一緒に絵本を楽しむということについてお書きしたいと思います。

絵本の読み聞かせは、一人ひとりに集中して子育てがしにくいといわれる多胎児にとっては、親が間近に感じられるよい機会です。それはちょうど、子どもたちが自分と本の一对一の関係を感じるのと同じかもしれません。親子の一对一の関係が多胎では作りにくいとよく言われるのですが、実は、子どもから見たら、ちゃんとお母さんは一人で目の前にいます。つまり、ある面一对一の関係です。まさにこれは、子どもたちが大勢で一緒に絵本を楽しんでいるのにもかかわらず、心の中では、自分と本がまるで一对一で向き合っているように感じるのとよく似ています。こどもは集中している時、そしてなんだかんだ遊びながらの時ですら、絵本を読んでもらうと、自分と絵本の間特別な関係が出現するように感じるのです。

以前にも書きましたが、絵本を親子で楽しむときは、忙しい日常の中でほっとする時間です。親子で共有する時間です。たとえそれが一瞬の短いものであっても、とてもとても大切なひと時です。僕も忙しい母が僕たち二人のために『機関手ケーシー』や『小熊のボンゴ』、あるいは『雪の女王』を読んでもくれたその情景を写真のように何ショットか思い出します。多胎の親御さんは、よくなかなかゆっくりと親子で共有する時間を持ってないとおっしゃるのですが、それはどうしてでしょうか？ご自分のこども時代の体験からそうおっしゃるのでしょうか？ふたごはそうした育てられ方しか知りません。たとえ短い時間であってもとにかく共有する時間、共有する場面があればそれでいいのです。重要なのは、親御さんがお子さんと一緒に時間を過ごしたいと心から願っているかどうかかなのです。そして、ふたごはその「心意気」を感じ取り、それを心の中に大切にしまうのです。

でも、こどもたちはいつも集中しているとは限りません。絵本を読んでいるはずなのに、けんかをしたり、邪魔をしたりすることも多いかもしれません。でも、それでもよいのです。絵本を読む、絵本を読んでもらうというのは勉強ではないからです。ですから、じゃれたりしながら読むのも一つの遊びだと思ふ時が楽になります。また、こどもは聞いていないようで、案外聞いていたりするものです。こどもにはこどもの楽しみ方があるものなのです。たとえ物語の筋をちゃんと追えなくても、絵が気に入ったり、面白いものが描かれていたことに気がついたりすれば、それはそれで大きな楽しみです。僕はよく娘たちとストーリーそっちのけで、「○×捜し」のようなゲームをしていました。「かえるさんはどこでしょう？」とか「ねこさんはいますか？」などと言って。

お父さんも得意な絵本を持つとよいと思います。僕は、『三匹のヤギのがらがらどん』や『いないいないばあ』などが得意でした。ちなみに、一般的にこどもは知っている絵本を読んでもらうのが大好きです。ですから、その意味でも得意な絵本を作ると、子どもと一緒にうんと楽しめると思います。知っている絵本だと安心して楽しめるのですね。未知の世界に常に出ていると言ってよい小さいこどもたちにとって、絵本はいつでも安心して戻ってくることのできる隠れ家なのかもしれません。また、お父さんはよくお風呂当番だったりしますが、その時にお話を適当に作ってお話ししてあげると楽しいでしょう。そして、お風呂から上がってわいわいがやがや得意の絵本を読んであげてください。お父さんはもうすっかり人気者です。そして、一度お父さんを人気者に仕立ててしまえば、こっちのものです。次々と「人気者分野」を作って、どんどん育児に参加してもらいましょう。遠慮は要りません。これはお父さんの

ためです。楽しい育児体験をせずに人生の駒を進めてしまうのはものすごく損です。また、小さい時にしっかりと関わっておかないと、大きくなってから子どもたちに全く相手にされなくなります。よく、仕事を理由にして家事・育児に参加しないお父さんがいますが、本当に無茶苦茶忙しい一部の人を除いて、工夫すればだれでも時間は作れるものです。お子さんのためというだけではなく、ご夫婦の長い人生のためにもいろいろ工夫してお父さんを「人気者」に仕立て上げてください。

さて、ヨーロッパの文化的伝統の中には、人生を本にたとえる考え方があります（日本ではよく旅にたとえられますね）。この考え方をとれば、幼い子どもとは、ようやく扉を開いたばかりの本ということになります。ちょうど目次の辺りかもしれません。あるいは、物語がゆるりゆるりとその歩みを始めた辺りでしょうか。まだまだこれから人生の山や谷がそれこそ山のように現れてくるでしょう。そして、神さまがその最後のページをめくり、終わりの扉を閉じるまで、ふたごたちの素晴らしい人生が続くのです。

子どもたちは大好きな絵本の扉を閉じる時によく言います。「あ〜、よかった」と。みなさんのお子さんたちが楽しいすてきな人生という本を読み続けることを祈ります。

「あ〜、よかった」ってね。

『ツインズぷらす』第24号（多胎育児サポートネットワーク）から転載・修正